

日中医学

特集・日中における病院機能評価

2013-10

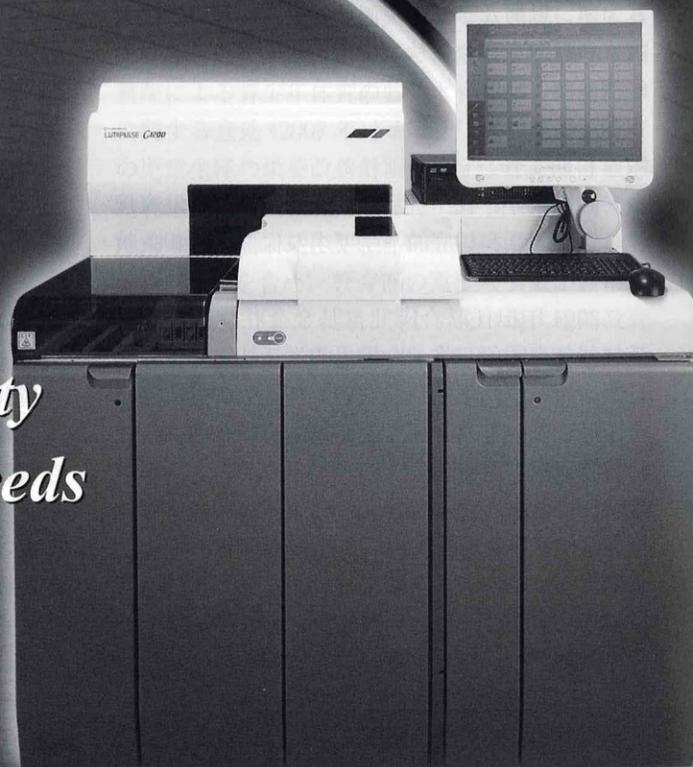
Vol.28 NO.2



Fully Automated Chemiluminescent Enzyme Immunoassay System

LUMIPULSE™ G1200

*Easy Handling and
Outstanding Flexibility
to better meet your needs*



注册号：国食药监械(进)字2011第3401359号
REG.NO.: SFDA(I)20113401359



[Contact]
2-1-1 Nishishinjuku, Shinjuku-ku, Tokyo 163-0410 Japan
fri-info@fujirebio.co.jp

2013 年笹川医学奨学金進修生同学会 学術交流会に参加して

名古屋市立大学教授
水上 元

2013年8月3日にハルピン市で開催された「民族医薬」をテーマとする笹川医学奨学金進修生同学会の学術交流会に第4回伝統医学視察団の一員として参加する機会を得た。薬学サイドの研究者としての視点から、この学術交流会の報告をする。

今回の学術交流会では新しい試みが導入されたということで、午前中の伝統医学と伝統薬物をめぐる新しい状況や研究に関する紹介を主題とする3題の講演、午後の黒竜江中医薬学大学薬学部の王喜軍副校長の研究室およびキャンパス内の薬草園とハルピン市の郊外にある薬草栽培実験基地の見学、および夕食後の日中両国の少数の研究者によるラウンドテーブルディスカッション(イブニングセッション)の3部構成で行われた。

伝統医学・伝統薬物に関する講演会(図1)

まず最初に、渡辺賢治先生(慶應義塾大学環境情報学部・医学部教授)が「伝統医学の国際化」と題して講演された。渡辺教授はまず、地球上のさまざまな地域でそれぞれの民族が育んできた伝統医学が地域の枠を超えてグローバルな注目を集めつつあることを多くの例をあげて紹介された。そのような中で伝統医学用語を標準化し、国際疾病分類に組み入れようとするWHOの動きを詳細に報告され、国際疾病分類に伝統医学の概念が取り入れられること



図1 学術交流会開会式の様子

は西洋医学と伝統医学を統合する新しい医療体系の形成を意味するものであり、この国際疾病分類を伝統医学の分野でも教育や臨床研究の国際基盤としていくことが必要であると結論された。

続いて、王喜軍教授(黒竜江中医薬大学副校長)が「中国伝統薬物の有効成分に対する生物学的評価システム」(英文要旨からの日本語訳)と題して講演された。「多くの生薬で構成され、いわば複雑系の薬物である中国伝統薬(以下、TCM)の効果をどう評価するか、また巨大な複雑系の薬物であるTCMの中からどのようにして有効成分を明らかにするか」とまず問題を提起され、これを解く鍵が、笹川奨学生として北海道薬科大学鹿野義弘教授のもとで習得された血清薬理学と最近のメタボロミクス

であると指摘され、ご自身の研究成果を紹介された。王教授はこの分野の研究成果をまとめられた総説を英文誌に発表されているので (OMICS: A Journal of Integrative Biology. 2012, 16: 414-421)、興味を持たれた読者をご参照ください。

最後に、平馬直樹先生 (日本中医学会会長) が、「日本の中医学の現況」と題する講演をされた。平馬先生は、中医学の現況だけでなく、我が国における伝統医学がいかに中国から受容され今日に至っているかを、16世紀の曲直瀬道三にはじまり、江戸時代、明治時代、1980年代以降の日中医学交流、そして最近の日本中医学会の活動まで詳細に跡づけられてお話をされ、このような歴史に疎い私には大変勉強になった。

黒竜江中医薬学大学および薬草園見学

午後からはまず黒竜江中医薬学大学薬学部にある王喜軍教授の研究室を見学した。前日に見学した附属病院のすぐ横に位置する薬学部棟は、病院と同様に新築されたばかりとのことで、まずその威容に強い印象を受けた。王教授の研究室は高速液体クロマトグラフィーの最新機器である UPLC と高性能質量分析器である Q-TOF/MS が組み合わさった LC-MS システムが何台も設置されているなど、中国における第一線の研究室の充実ぶりが伺われた。

続いて、キャンパス内にある薬草園に立ち寄ることができた。都市の中心に位置する大学の構内にある薬草園としてはかなり広い面積をしめていた。園内には薬用植物が雑然と植えられ、植物名などを示すラベルも全く設置されていず、日本の薬系大学にある薬草園とはずいぶん違った印象であった。その後、ハルピン市街の北部を流れる松花江を渡り、太陽島公園を横に眺めながら1時間ほどバスで走って同大学の薬材栽培試験基地を訪れた。さすがに中国ともいべき広大な面積を持つ農場で、説明による



図2 イブニングセッションの様子

と二つの部分に分かれており、その一つは食用しても用いられる薬用植物の栽培生産を行っているということである。ハルピン市内にあるレストランと契約栽培をしているとのこと。もう一つの部分は五味子の生産農場で、広大な農場一面に完熟前の果実をつけたチョウセンゴミシが植栽されていた。

イブニングセッション (図2)

市内に戻り、モスクワ劇場でのショーの観劇を兼ねた懇親会に出席後、最後にイブニングセッションとして日中両国の専門家によるラウンドテーブルディスカッションに参加した。このセッションでは、まず日本大学医学部の酒谷薫教授が、光トポグラフィを用いてストレスに対する漢方薬の効果を研究されてきた先生の経験を踏まえた基調報告があり (図2)、これを踏まえた活発な議論があった。議論の中心は、TCM や漢方薬の有効性を現代自然科学 (西洋科学) の方法で解明できるか、またそのための有効な方法論は何かということであった。午前中の講演会で渡辺先生と平馬先生が、伝統医学が西洋医学とは異なる一つの医学として先進諸国で受容されつつあることが紹介された。この流れをさらに推し進め、より多くの人々が伝統医療の恩恵を受けられるようにするためには、その有効性に関する

(西洋) 科学的実証が不可欠だと思う。その意味では、やはり午前中の王教授の講演にあったような OMICS approach が非常に有効だと感じた。ある器官・組織・細胞に存在する全てのタンパク質あるいは代謝産物を網羅的に解析するというトランスクリプトミクスやメタボロミクスは、分析的なアプローチを究極にまで推し進めれば、全体像の把握に至るということを示しているように思う。日中両国で若い研究者によって民族医学の研究にこれらの方法がより深く導入され、新しい成果が生み出されることを願う。

おわりに

1日だけの学術交流会であったが、講演会、見学会、イブニングセッションともに充実していて、薬学分野での民族薬研究者である私には大変に刺激的でかつ情報量の多い1日であった。講演会で質疑応答の時間がなく、また日本側の参加者が前の方に、中国側の参加者が後方に着席する配置であったこともあり、中国側の参加者の反応がよくつかめなかったことは残念であった。

最後に、本学術交流会に参加の機会を与えていただいた安達勇理事長をはじめ日中医学協会の皆様にお礼申し上げます。



人にやさしい医療へ

テルモは、ユニークな輝く技術で
人にやさしい医療を実現し、
医療を受ける人・支える人、双方の信頼に応えます。



テルモ株式会社 〒151-0072 東京都渋谷区幡ヶ谷2-44-1 <http://www.terumo.co.jp/> ©TERUMO.テルモはテルモ株式会社の登録商標です。©テルモ株式会社 2009年3月